

街のおもしろ文化観察学入門

その七

松江市石橋町編

石田晶子

カネモリ醤油から千手院へ

集合場所はカネモリ醤油の前。カネモリ醤油さんには、「地域文化研究」という授業の見学で毎年大変お世話になっており、実は私たちは今回の石橋町の街歩きの一週間ほど前に見学させていただいたばかりでした。そのため、この日は取

六月四日、二年生編集部員七名で松江市石橋町を歩きました。石橋町は江戸時代に職人町として栄えた町で、現在でも酒や醤油の醸造会社などが存在し、歴史と文化を感じることでできる素敵なまちです。



■ (上段) 出発前、カネモリ醤油の前で記念撮影。(下段左) 木桶をかき混ぜているところ。(下段右) カネモリ醤油の外壁と筆者。

現在も木桶の中でじっくり熟成させる伝統的製造方法を守っておられます。私たちは木桶がずらつと並ぶ蔵の中を見学させていただきました。蔵に入った瞬間、醤油の香りが押し寄せてきます。私たちはもろみが入っている木桶をかき混ぜる作業を体験しました。櫂という道具をもろみに突き刺して空気を送り込むのですが、櫂を入れ、引き抜くたびに醤油のいい香りがします。最初は重たくなってなかなか大変な作業でしたが、とても貴重な体験をするこ

材なしかったです。ですが、ここで見学の時の様子を少しだけ紹介しておきたいと思えます。カネモリ醤油は明治八年の創業。今年が創業一三七年という大変歴史のあるお店です。最近昔ながらの製造方法で醤油を作る醤油屋さんが減っている中で、

材なしかったです。ですが、ここで見学の時の様子を少しだけ紹介しておきたいと思えます。カネモリ醤油は明治八年の創業。今年が創業一三七年という大変歴史のあるお店です。最近昔ながらの製造方法で醤油を作る醤油屋さんが減っている中で、



千手院の参道を上り始めると右手に「尊照山千手院」と書かれた木の看板がありました。気になるのはその下。なぜか傘立てにゴルフクラブのようなものが入れてあります。「なぜ？」と思いつつ手に取ってみると、杖として使えるようになっていました。きつと坂になってい

とが出来ました。カネモリ醤油を後にし、すぐ近くの千手院に向かって歩き始めました。「あつ、何これ？」——さつそくメンバーが何かを発見！それは民家から参道に大きくせり出した松の木の枝からぶら下がる赤い札……。「これは何だろう？呪いの札か何かかなあ？」と冗談交じりに話しながら眺めていると編集長が一言。「車に松の木があることに注意させる目印」とのこと。なるほど、確かに赤い札は目立つなあと納得しながらも、「やっぱり何かのお札みたいだ」と考えながらその場を後にしました。

■ (上段) 赤い札を発見！
(下段) 杖を持つ筆者。



■ (上段) 井戸の蓋、持ち上がるかな? (下段左) 井戸の近くの水神様。(下段右) 石橋町2丁目の鑿倉庫。

る参道を上る人のために用意されたのだ
と思うと、思わずにつこり。ちよつとし
た嬉しい心遣いですね。

千手院と言えば枝垂桜で有名ですが、
私たちが行ったところはもちろん花はな
く、葉が青々と茂っていました。参道を
上りきり、奥へ進んでいくと、松江市内
が一望できます。松江城も見え、まさに
絶景! 桜を見に来るのもいいですが、
この風景を楽しむのもいいですよ。

古井戸と李白酒造

千手院に参拝し終えた私たちは、先ほ
ど坂を上って来る途中、気になっていた

倉庫を見に行くことにしました。倉庫に
向かって歩いてみると、小さな井戸を発
見。井戸の上にはコンクリートの蓋が載
せられており、メンバーの一人が持ち上
げてみると……わりとすんなり持ち上
り、隙間からのぞいてみるとまだ井戸の
中には水があるようでした。きつと昔は
毎日のように使われていた井戸だったの
だろうなと思えました。また、井戸の近
くには水神様を祀る祠がひっそりとあ
り、昔の生活の様子と人々の信仰心を感じ
ることが出来ました。

お目当ての倉庫は井戸から少し行った
ところにあります。大きな倉庫の上の方

には「石橋二丁目鑿
庫」の文字が。なる
ほど、大きな倉庫は
鑿庫だったのです。
鑿と言えば松江の伝
統行事、鑿行列に使
われる大きな太鼓で
すが、このような住
宅街の中にひっそり
と保管されているの
がなんだか不思議で
した。

石橋二丁目鑿庫か
らしばらく住宅街を
東に歩くと李白酒造
に着きました。お店
の方に取材をお願い

すると、まず近くにあ
る井戸に案内してくだ
さいました。この井戸
は「大井戸」といい、
文久三(一八六三)年
に作られたそうで、現
在でもこの井戸と同じ
水脈の水が李白酒造の
中に引かれていて、お
酒の醸造用として使わ
れているそうです。こ
のように石橋町の下に
は大変いい水脈が通っ
ているため、豆腐屋さ
んや醤油屋さん、酒屋
さんなど水が重要なお
店が石橋町に集まった
のだと教えてくださ
いました。

次に案内していただ
いたのは酒蔵です。こ
の酒蔵は「酒仙蔵」と名付けられていて、
「酒仙」とは唐の詩人、李白の別名だと
教えていただきました。酒仙蔵の中に入
ると麴の甘いにおいが漂っています。奥
にはお酒の入った大きなタンクがたくさん
見えました。

店内に戻ると、お店の方が「よかった
ら試飲していかれませんか?」と言っ
てくださったのですが、残念ながら私たち
は全員未成年だったため丁寧に断り
し、その代わりにお酒造りに使われてい
るお水をいただくことになりました。お



水はとても冷たく、さらつとしていて、
とてもおいしかったです。歩いた後の
で生き返る気がしました!

不思議な板塀の家

李白を出て南の方にしばらく歩いて行
くと、「児守稲荷神社」という小さな神
社がありました。この神社は小泉八雲に
縁のある神社です。小泉八雲はこの社の
願掛けの絵や文に興味を持ち、よく訪れ
たそうです。現在は境内にすべり台やブ
ランコがあって、近所の子供たちが遊べ



■ (上段左) 李白店内にある大きな甕。(上段右) 李白の方に案内してもらった大井戸。(下段左) いただいたお水で乾杯! (下段右) 李白の酒蔵の中。



■ (上段) プランコではしゃぐ二人。(下段) 玄丹お加代の石碑。

きな木製の歯車、壁には巨大なのごりがありません。天井からはピン玉（漁業で使うガラスの浮き玉）がたくさん吊してあります。とにかく所狭しと古いものがたくさん置いてありました！ なんだかとても不思議な空間でした。

もっと不思議だったのが福間さんのお宅の

のようになっていました。取材メンバーも思わず童心に帰ってプランコに乗ってしまったのですが、座るところが柔らかい素材できていて、お尻にフィットするようになっていました。びっくりです！

児守稲荷神社から西の方に歩いていくと、何やら面白そうなお宅を発見しました。私たちは、さっそく取材を申し込むことにしました。「すみませーん……島根県立大学短期大学部のものですが……」。突然訪れた私たちをニコニコしながら迎え、取材の申し入れを快諾してくださいましたのは、このお宅のご主人の福間武男さんでした。

家の中に入らせていただくと、そこには見たことがないようなものがズラリ！ まず目に入ったのは大きな甕です。私がすっばり入りそうです。さらに奥には大

板塀です。一見すると何の変哲もないかのように見えるこの板塀（実際、私は言われるまで気づきませんでした）。しかし、よく見ると何か……ん？ 実は、この板塀は車輪がついていて、レールの上を移動できるようになっているのですが、そのレールが「く」の字形に曲がっているのです。

福間さんのお話によると、家の前の道に合わせてこのような形にしたということでした。

板塀のなかは庭で、駐車スペースもあります。板塀が移動するのは車の出し入れのためだったのですね。

そして、驚いたことに、この変わった板塀は福間さんがご自分で作られたそうなのです！ メンバー一同「わあー！すごい！」を連発。さらに、この塀の上には屋根が取り付けられていたのですが、この屋根も上下に動かせるようになって

いました。これにまたもやメンバー全員、驚きの声の連発でした。

素敵な取っ手飾り

福間さんのお宅から少し進むと、左手に砂利の道がありました。不思議に思っていたのぞいてみると、何だか古そうな石碑がありました。見てみると「玄丹お加代女之墓所」の文字が。玄丹お加代のお墓

があるお寺の入り口だったのです。玄丹お加代は大変肝の据わった女の人で、松江藩の窮地を救った女性としてその逸話が残されています。現在は宍道湖畔にお加代の像が建てられていたり、玄丹そば（減反と玄丹をかけている）というそばがあるなど、今でも松江の人々に親しまれています。

玄丹お加代の石碑からしばらく歩く



■ (右上段) 福間さんと筆者。(右下段) 福間さんのお宅の中。(左上段) 福間さん宅の板塀。レールが「く」の字に曲がっている。(左下段) 木製の歯車。



■ (上段) カネモリ醤油で帳場を任されている峰谷美代子さん(後列左端)と記念撮影。(下段)石川屋の外観。

ばらくして帰ってこられました。実は西村さん、四、五年ほど前から本学健康栄養学科の授業にそば打ちの講師として来ておられるそうで、短大とは縁のある方だったのです。驚きました！「きがる」という少し変わった店



■「きがる」の店舗と筆者。



■「きがる」の割り子そば。おいしかったです！

と、出発地点であるカネモリ醤油まで戻ってきました。そこで改めてお礼を言いに伺うと、見学の時に説明してくださった峰谷さんが出てこられたので、一緒に写真に写ってもらいました。

カネモリ醤油を出ようとして出口の方を見ると、引き戸の取っ手に変わった飾りが付いているのに気付きました。「とても素敵だなあ」と思い聞いてみると、松江市ではいろいろな商店がこのように取っ手飾りを引き戸に付けているようで、壁には第一九回しまね景観賞の奨励賞を受賞した時の賞状が飾ってあります。石橋町ではカネモリ醤油の他にそば屋さんの「きがる」と、魚屋さんの「石川屋」にも付けられていると教えてくださいました。私は「きがる」でそばを是非食べたい!と思うていたので、後日改めて取材に行くことになりました。



■(上段)カネモリ醤油の取っ手。(下段左)「きがる」の取っ手。(下段右)石川屋の取っ手。

出雲そば「きがる」

カネモリ醤油から西へ少し行っただころに、昭和五年創業の出雲そば「きがる」があります。七月二十六日、昼食も兼ねて取材に行きました。店主の西村保則さんはお留守でしたが、そばを食べながら待っていると、しばらくして帰ってこられました。実は西村さん、四、五年ほど前から本学健康栄養学科の授業にそば打ちの講師として来ておられるそうで、短大とは縁のある方だったのです。驚きました！

名について聞いてみました。これは「気軽に来てください」という意味と、「七転び八起き」になぞらえて、転ぶことなく起きたまま留まる「起ヶ留」との思いを合わせて初代が名付けたと教えていただきました。さすが八二年も続くお店の名前には深い意味があるんだなあと感じました。

また、そばに使われているそば粉はすべて店内にある石臼で挽いておられます。このこだわりにも感じました。

帰りには取っ手をしっかり写真におさめました。カネモリ醤油のものはお店のマークのような取っ手飾りでしたが、「きがる」のものは「そば」の字がデザインされていました。取っ手飾りはお店の内側にだけ付けています。なんだかそばを

食べ終わったお客さんへの心遣いのよう感じました。次に私たちは「きがる」から少し南に行ったところにある石川屋というお魚屋さんを訪ね、取っ手飾りの写真を撮らせていただきました。石川屋の飾りは「きがる」と同じように「石川」の字がデザインされた形になっていました。このように、取っ手までお洒落になっているのは、とても素敵だなあと感じました。

今回、私たちはたっぷり時間をかけて街歩きをすることで、石橋町の魅力をたくさん発見することが出来ました。とても面白くて楽しかったです！取材に協力してくださった皆さん、大変ありがとうございました。今後、機会があれば他の街でも街歩きをしてみようと思います。(いしだ・しょうこ/文化資源学系二年生)

今岡弘延編著

なつかしの松江

明治・大正・昭和初期絵葉書コレクション

2012年5月
ワン・ライン
6,543円+税

評 安部 登



松江市天神町の白潟天満宮通りに、今岡ガクブチ店がある。明治七（一八七四）年創業の老舗で、当時は今岡商店として営業していたという。

明治三十年代から全国的に絵はがきの印刷・発行が行われるようになったが、松江では今岡商店が絵はがきの版元としての一翼を担っていた。

数年前に今岡ガクブチ店の倉庫から、二〇〇〇点の絵はがきと二〇〇枚のガラス乾板が発見され、松江市文化財課と島根大学白潟サロンの協力によってデータバンクが完成した。

今回刊行された『なつかしの松江』には、明治・大正・昭和初期の絵はがきと市街図等の写真が約三〇〇〇点収録されている。写真は、①松江市全景、②宍道湖・嫁が島、③松江の橋、④大橋川・中海周辺、⑤津田の松原、⑥松江城周辺、⑦建築物、⑧鉄道、⑨松江港・飛行場、⑩軍隊、⑪学校、⑫神社・仏閣、⑬祭り・神事、⑭街並み・市内風景、⑮博覧会、⑯記念行事、⑰松江の偉人たち、⑱松江市の周辺、⑲絵画絵はがき・絵はがきの袋、に分類し、それぞれに発行年、発行元、解説等が記述されていて、写真から時代を感じ、歴史を読み取ることができる。

巻頭と巻末にある松江市全景は、四枚組みと七枚組みのパノラマ式で、明治から大正時代の松江市全体を把握するのに便利である。また、昭和七年発行の観光案内地図、明治四十一年と昭和八年発行の松江市街図は、現在と対比する上で参

考になる。

明治から大正時代にかけて記念絵はがきが盛んに作られた。東宮殿下山陰行啓、鉄道設置、松江連隊設置、島根県庁落成、鉄道連絡記念物産共進会、松江開府三百年（以上明治）、御大典、城山稲荷神幸式、松江病院落成、新大橋開通（以上大正）等の絵はがきには記念スタンプが押されている。スタンプには日付と

名称が記されており、それによって記念事業の趣旨を理解することができる。

ラジオがなく、写真も高価な時代に、絵はがきは重要なマス・メディアであった。そして絵はがきは、全国の情報をいち早く伝える先端商売であった。

松江の水彩画家中村秀之助の松江風景シリーズ（嫁が島・小泉八雲旧居・松江大橋・松江城遠望）は柔らかな色彩で描かれている。また、色刷りされた絵はがきの袋は、しゃれたデザインで松江の名所を表現していて、見ているだけで楽しむことができる。

本書の絵はがき写真を眺めると、いろいろな発見がある。例えば、宍道湖の写真では、六艘網や四手網の漁はあるがシジミ舟は見当たらない。水郷祭のそのり舟競争や少年の遠泳競技で賑わい、定期航空路の水上飛行機も浮かんでい



今岡弘延プロフィール

1954年、松江市生まれ。1977年、ロシア・欧州・アジア各地を1年間旅し、見聞を広める。帰国後、東京のギャラリーに勤務。1982年、松江に帰り、今岡ガクブチ店を継ぐ。2006年に同店倉庫より多数の古い絵葉書が見つかり、データベース化と研究が進む。今回の出版はその集大成。なお、今岡ガクブチ店は『のんびり雲』第4号（2010年）で取り上げさせていただいた。

る。また、色彩豊かな「神国大博覧会」の写真が掲載されている。この博覧会は、昭和十三年四月五日から五月二十九日まで、松江市で開催予定であったが、日中戦争により昭和十五年に延期され、戦局の拡大と共に中止になり、幻の博覧会となった。

絵はがきは、昔ながらの素朴な風景、建物と街の様子、人々の風俗や世相等、今ではほとんど忘れ去られた、かつての松江へといざなってくれる。

本書に掲載されている市街図や写真を持って街を歩けば、明治・大正・昭和初期と余り変わらない情景に驚きを感じるだろう。何か懐かしいと思うと同時に、松江の街並みを再認識し、更に松江を対象とする研究課題が発見できるかもしれない。

（あべ・のぼる／元松江郷土館館長）



2012年3月
ハーベスト出版
1,000円+税

周藤利夫プロフィール

1935年、松江市生まれ。高校卒業後、長年、鳥根県の畜産関係の仕事に従事。2002年に木次町から依頼を受け、二代目さくら守に。以来、2008年に三代目に引き継ぐまで6年半、木次の桜を守ってきた。なお、周藤利夫さんは『のんびり雲』第1号(2007年)の特集「働く/さまざまな仕事人」で取り上げさせていただいた。

周藤利夫 さくら守三代のリレー 「さくら、良き友よ」

評 鹿野一厚

『のんびり雲』第一号でも取り上げた、雲南市のさくら守・周藤利夫さんが本を出版した。平成十四年から二十年までの六年間、さくら守として働いてきた体験を書き記した本である。

平成二年、旧木次町の斐伊川堤防の桜並木が、財団法人日本さくららの会から「日本さくら名所一〇〇選」に認定された。これをきっかけにして、同町の桜を維持管理するために「さくら守」が誕生した。初代の川淵昭一さんの跡を継いで、周藤さんが第二代さくら守に就任したのは、平成十四年であった。

私たちは花が咲く春にだけ桜に注目するが、さくら守の仕事は、なんとほぼ一年中続く。本書にはその仕事内容が綴っ

てあるのだが、随所に、さくら守と桜の木との「絆」を垣間見ることができる。

たとえば、春と冬、年二回の施肥作業である。冬の肥料は「寒肥え」と呼び、春にきれいな花を咲かせるための栄養補給であるが、春にまく肥料は、「きれいな花を咲かせてくれてありがとう」という気持ちを込めて、「お礼肥え」と呼んでいる。さくら守は、肥料を通して桜と会話をしているのだ。

害虫や鳥獣との戦いは圧巻である。コスカシバというガの幼虫は、樹皮の内側に潜って材を食べ、木を弱らせて枯らしてしまふ。この「初夏の天敵」に対しては、「樹幹をきめ細かく観察し、ヤニや木屑が出ていればその部分を鉋で削り取って

一匹一匹を捕殺していく」。ウソという小鳥は、毎年冬になると群れでやってきて、桜の花芽を食べ尽くしてしまふ。この「憎き敵」に対しては、すこし南方にある健康の森を餌場として与えておいて、斐伊川堤防の桜並木には、枝に使用済みのCDをつるして追いつく。試行錯誤の結果、ウソは光が反射する物を恐れることを突き止めたのだ。

病気との闘いは壮絶である。ならたけ病は、ナラタケというキノコが寄生することによって、木の根が腐ってしまう怖い病気である。根の病気なので見つけにくく、放っておくと「病原菌が周囲の土壌を汚染して病気を広げてしまふ」ので、最悪の場合は「罹患した木を根を丸ごと掘りあげて土ごと処分する」。大木になると、掘り穴の直径は三、四メートルにもおよぶ。

この他にも、草刈りや水やりはもちろんのこと、他の病害虫から台風や豪雪などの自然災害まで、さくら守は、桜を見つめ続けながら臨機応変に対応している。五万本を超える雲南市の桜。その一本一本に番号札を付け、実にきめ細かく管理している。いったい何がさくら守を支えているのだろうか。

木次の斐伊川堤防に桜が本格的に植えられたのは、昭和になってからである。木次の交流センターで地元の老人たちは、自分が植えた桜には自分の名札が付いてあり、朝晩水をやって大事に育てたという話を懐かしそうに語っていた。木

次の桜並木は、それを慈しむ地元の人たちの心とセットになって、昭和初期に誕生した比較的新しい文化資源なのである。

「この町の桜は人々の歴史や心が育んでいる」。さくら守には、桜を愛し育んできた先人たちの声が聞こえているのだ。このような先人たちの声が、さくら守を支えている。

しかし、それだけではない。本書の最後に、不思議なことが書いてある。「桜のお世話を通じて、私は確信したことがある。それは桜と私たち人間は深くつながっているということである。桜が美しい花を咲かせ人々を喜ばせる。それに感謝し人々は、物言わぬ桜に関心を払い、守り育てていく。(中略)それぞれが「ありがとう」の気持ちで相手に応えていく……、まさに両者には強い『絆』があるという思いである」。これは、欧米の自然科学的な発想からはけっして出てこない考えである。

「心をこめて手入れをしてやれば、(桜は)必ず応えて美しい花を咲かせてくれる」。桜との間にこのような信頼関係をイメージすることができるところこそ、大変な作業を日々こなすことができるのだ。さくら守とは、桜と人との絆を実感できる存在であり、日本古来の自然とのつき合い方をいまに伝える稀有な存在なのである。

(しかの・かずひろ/総合文化学科教員*生 熊人類学)

温泉津温泉の旅

澤松 知

島根といえど？ と考えて、思いついたのは蕎麦と温泉。島根の温泉をネットで検索してみると「温泉津温泉」の文字。「おんせんつおんせん？」——私は、読み方が分からないところに興味を持ち、ここに取材に行きたいと思った。

八月九日、松江の短大からジャンボタクシーに乗り込み、温泉津温泉街に向かった。同行したのは、鹿野先生と一年生メンバー四人。二時間三〇分ほどゆらゆら揺られて着いたのは、落ち着いた雰

囲気の小さな街であった。この小さな湧き湯が温泉場として整備されたのは、室町時代になってからであった。その後、石見銀山の銀の産出量が増えるにしたがって、温泉津温泉は、銀山の鉱夫や運搬作業員、商人などが利用する温泉町として栄えた。

私たちは、温泉津温泉に着いてまず、温泉津湾に面した駐車場で車を降り、そのすぐ横にある観光案内所「ゆうゆう館」を訪ねた。中に入ると、大きな水瓶「はんど」があり、ケースの中には北前船の模型が飾られていた。そこで地図を入手し、案内所の方にお話を伺った。大人気で突然押しかけたにもかかわらず、こやかに温泉津温泉について話してくださった。

温泉津温泉の概要
このあたりは、大田市温泉津町温泉津。温泉街の町並みは、二〇〇四年に重要伝統的建造物群保存地区（重伝建地区）に選定されていて、すぐ近くにある沖泊港や銀山街道などとともに、世界遺産・石見銀山遺跡の一部でもある。大森銀山で産出した銀は、銀山街道を通って沖泊港まで馬で運ばれ、沖泊港から日本国内だけでなく、明、そしてポルトガルやオランダなどへも輸出されていた。

温泉津では、平安時代にはすでに温泉が湧いていることが知られていた。『温泉津温泉由来記』には、大きな古狸が池に浸かって傷を癒やしていたが、その池の水が温かい湯であったことから、温泉津温泉が発見されたという伝説が残っている。

温泉津の主な観光スポットは、次の二つである。まず第一にゆうゆう館から東に向かつて伸びる温泉津温泉街、次に温泉街の東端から東北東約三〇〇メートルの高台にある「やきもの里」である。私たちは、これらのスポットを回ってみることにした。

温泉津の主な観光スポットは、次の二つである。まず第一にゆうゆう館から東に向かつて伸びる温泉津温泉街、次に温泉街の東端から東北東約三〇〇メートルの高台にある「やきもの里」である。私たちは、これらのスポットを回ってみることにした。

家の玄関には、「内藤家庄屋敷」と書かれた案内板が立っていた。それには、内藤家は、元々は毛利家の家臣であった。一五七〇年、毛利元就の命を受けた初代内蔵丞は、温泉津湾の湾口に鶴の丸城を築き、温泉津の奉行として芸国から赴任してきた。その後、関ヶ原の戦いに敗れた毛利氏は温泉津から撤退したが、内藤家は温泉津に土着し、代々年寄りや庄屋を務めてきた。そのかたわら、廻船問屋や酒造業、郵便局なども経営した。

温泉津の主な観光スポットは、次の二つである。まず第一にゆうゆう館から東に向かつて伸びる温泉津温泉街、次に温泉街の東端から東北東約三〇〇メートルの高台にある「やきもの里」である。私たちは、これらのスポットを回ってみることにした。



■温泉津温泉街入り口。



■道端の茶色い壺。



■ (右上) 内藤家庄屋敷敷。 (右下) なまこ壁。(左) 龍御前神社。

ということが書いてあった。なまこ壁の立派な土蔵といい、家紋入りの雨樋といい、私たちは「なるほど」と納得した。内藤家から約五〇メートルほどで、緩やかに左にカーブしていた道は突き当りとなる。そこを右に曲がって道なりに約七〇メートル歩いていくと、左手に神社が見えた。龍御前神社である。本殿の背後の丘の上に、大きな岩が見える。その岩はまるで、少し右を向いて大きく口を開けた龍の顔のようである。まさに、龍の前の神社である。私たちは、

龍の岩まで登ってみることにした。本殿の右後ろに階段がある。途中からは山道になるが、ほんの五分で龍の岩に着く。大岩の直下には、神社の旧本殿が建っていた。背後を振り向くと、温泉津温泉街が一望できた。濃い灰色の屋根と石州瓦の赤い屋根が半分ずつあって、独特の美しさをたたえている。下に降りてみると、丁度地元の人が歩いていたので、道端にある壺について尋ねてみた。「壺の中には蠟燭が入っていて、夜に灯をともしようになっているんだよ」と、歩みを止めて丁寧

に教えてくださった。私たちの頭の中に、夜の温泉街の情景が浮かんだ。神社から約二〇〇メートル東へ行くと、右手に大きなお寺があった。西楽寺である。門前の碑には、西楽寺の長い歴史と宗派(浄土真宗)などが書かれている。門をくぐって左手には、「真心」と書かれた台の上で、鬼の頭が二つ、鉄の棒で押さえつけられながらこちらを見ている。私

には鬼が笑っているように見えたが、同行の大西さんには悲しんでいるように見えた。境内は意外に広く、正面の大きな石段の上には堂々とした本堂が横たわっている。本

堂の内部には、黒く太い柱の上に金色の龍の装飾が施されていて、私は感動して思わずはしゃいでしまった。住職に電気を点けていただき、焼香をした。作法を知らない私たちのために、住職はそつとカンニングペーパーを出してくださいました。この日はちょうど寺で子ども会が予定されていて、その準備で忙しい時にお邪魔してしまったのだが、住職は時間を割いてお話を聞かせてくださった。この温泉津は江戸幕府の直轄地であったこと、現在の人口は往時の四分の一に減ってしまったこと、少人数で昔と同じようにお寺を支えるのは大変であることなどを教えていただいた。しかし、あまりにもお忙しそうだったので、住職のお名前を聞く機会を逸してしまった。



■ (上段右) 西楽寺正面。(上段左)「時計(TOKI)」入り口。(下段右) 西楽寺本堂の装飾。(下段左) 西楽寺でお焼香。

ここで時刻は十二時半。歩き始めてまだ一時間ほどだが、日射しがきつく少々疲れたので、休憩がたがた昼食をとることにした。何軒か食

事ができそうな店を物色して、値段が手ごろな「時計」という店に入った。昔は時計屋だったそう。明るく元氣な女性が、店を切り盛りしている。昼食は、みんなで田舎定食をいただいた。

やきものの里

昼食後、ゆうゆう館の駐車場まで戻ってジャンボタクシーに乗り込み、「やきものの里」へ向かった。温泉街の先のト



■ (右上) 登り窯「笹屋窯」。 (右下) やきもの館の窪田真菜さん。 (左) 登り窯の中。

物がある。ドアを入ると、正面には受付とお土産用の小物の棚があり、温泉津焼の小さな花瓶やコースターなどが売られていた。

入り口の左手には、現代の温泉津焼の陶器が展示してある。コーヒーマップから大きな傘立てまで、さまざまな日用品が並んでいた。廊下を突き当たって左に折れると、一番奥には資料室がある。この部屋には、

はんどやとつくりなどの伝統的な温泉津焼が展示してあり、温泉津焼の特徴や歴史などが説明してあった。

一通り館内を見て回ったところで、スタッフの窪田真菜さんにお話を聞かせていただいた。

温泉津では、江戸時代の中期から、都野津層と呼ばれる地層から採れる粘土を用いて陶器がつくられていた。初めは瓦が多かったが、後にははんどやとつくり、すり鉢などの実用品が多くつくられるようになった。

都野津層の粘土は石州瓦にも用いられるが、良質できわめて耐火温度が高い。約一三〇〇度の高温で焼き締めることができるので、うすくてもかけにくい丈夫な陶器をつくることができるそうだ。そのため、温泉津焼のはんどや壺は温泉津



■ 散策の途中で出会った、日向ぼっこをしているねこ。

港から日本各地へ輸送され、丈夫で長持ちすると歓迎された。

温泉津焼の最盛期は明治から昭和初期にかけてであり、この時期、温泉津には一〇以上の登り窯があった。しかし第二次大戦以降、水道やプラスチックの普及により、温泉津焼の生産は急速に衰退していった。

いまでは、民芸運動を推進した河井寛次郎の流れをくむ森山窯、椿窯などの三つの窯が、伝統を継承しながらも新しい温泉津焼を生み出そうとしている。やきもの館には、それぞれの窯元の作品が展示してあった。赤色の辰砂釉を使った椿の花びらが、斬新でひととき目を引いた。

薬師湯温泉で湯治体験

午後三時を回ったので、私たちは再び温泉街へ戻って温泉に入ることにした。

温泉津温泉には、元湯（泉薬湯）と薬師湯という二つの湯元がある。今回私たちは、「日本温泉協会による審査でオー

ル5という最高の評価を受けている」という文言に惹かれて、薬師湯に入ることにした。レトロな洋風の外観が、とても目立っている。

建物の入口は男湯と女湯で別れていた。入る前に先生と取材の段取りなどを相談していると、中からスタッフの女性が出てきて、入口は別だが中でまた合流できることを教えてくれた。中に入ってからスタッフの方を交えて話した結果、温泉に入ってから三階のテラスで取材させていただくことにした。

建物の中央部には階段があり、階段を境にして女湯と男湯が分かれている。温泉に入る前に、スタッフに薬師湯の入り方を教えてもらった。

この薬師湯は通常より熱いお湯なので、身体を慣らしつつ入らなくてはいけないそうだ。シャワーで汗を流してから、まず足だけ湯船に入れて、少し慣らしてから徐々に身体全体を沈める。一、二分ほど浸かったら、一度外に出て休む。そしてまた入る。何回も出たり入ったりを繰り返すが、薬師湯の入り方なのだそうだ。

薬師湯は、銭湯のように身体の汚れを洗い流す場所ではなく、湯治を目的としている。このように短時間で出入りを繰り返す入り方は、湯治つまり身体の治療のための入り方なのである。入浴し終わったあとは、シャワーで湯を洗い流さず、そのまま出た方が効力が高まるということであった。

説明を聞き終えてから、私たちは女湯



■(上段右)「石州瓦」の赤い屋根。(上段左)薬師湯のガーデンテラス。(下段右)薬師湯正面。(下段左)曲がりくねった道。

の中に入った。中は更衣室になっている。脱いだ服をロッカーにしまつてから、いざ浴室へ。言われたとおり、薄い茶褐色のお湯に何度も浸かると、肌はつるつるになった。すっきりした気分が浴室から出ると、足が真つ赤つかでみんなして宇宙人ようになっていた。

内藤さんへの電話取材

女湯を出てから、中央の階段を登って三階へ向かった。

三階の屋上部分は、ガーデンテラスになっている。テラスに出てみると、火照った体に心地良い風が吹き通っている。このテラスには、白いテーブルとイス、そして木製の二人掛けブランコが置いてある。テーブルの上やテラスの周囲には、花や木の鉢が置かれていて、風景に潤いを与えている。

私たちが突然押しかけたため、薬師湯の経営者・内藤陽子さんはご不在であったが、スタッフの方が急遽電話を取り次いでくださった。

内藤さんは、薬師湯を経営するかたわら、島根大学医学部の大学院で温泉の効用を科学的に解明しようとしている。それだけでなく、温泉津まちづくり委員会の委員として、温泉津全体の振興にも力を注いでいる。短時間の取材の中で、内藤さんは、内藤家と温泉津の歴史、温泉津のまちづくりへの思い、そして温泉を活用したまちづくりなど、実に様々なことを精力的に語ってくださった。

その中でも特に私たちの興味を引いたのは、「現代型湯治」で

ある。

内藤さんは、温泉に浸かる伝統的な湯治だけでなく、それに運動と食事、そして文化・芸術的な体験をも組み合わせて、身体の治療と心の健康回復とともに目指そうとしている。これが現代型湯治である。

具体的には、アップダウンのある温泉津の町を二本のストックを持って歩くこと(ノルディック・ウォーク)や、やきもの館での陶芸体験などと、温泉津温泉の利用とのコラボを考えていらつしやるのだ。

温泉や宿泊施設、町並みや陶芸など、温泉津にある様々な文化資源を組み合わせ活用することによって、温泉津全体の振興を図りたい。そんな内藤さんの熱い思いが、携帯電話を通して伝わってきた。

私は、最初、伝統的建造物群保存地区と言われてもピンとこなかった。しかし、一日かけて温泉津を歩いてみて、なぜ温泉津が重伝建地区に選定されたのかが分かった。

千年以上の長い歴史をもつ温泉町の、その町並みがいまも残っている。もちろんこのことが、重伝建地区選定のための条件である。しかしそれだけでなく、その景観を維持・管理し、さらによりよい形で次世代に伝えようとする人びとがいる。これなくして、温泉津はけつして重伝建地区に選定されることはなかったで

あろう。薬師湯の内藤さんが、薬師湯ホームページ中の湯婆婆ブログで書いているように、温泉津はまさに「生きた博物館」なのである。

今回の旅は、事前の下調べが十分でなく、手探りで取材を進めることになってしまった。しかし、出会った人びとは皆、私たちを笑顔で優しく迎え入れてくださった。帰りの車中では、歩き疲れてぐったりしていたが、温泉とそこに暮らす人びとのおかげで、心も体もポカポカと温かかった。

(さわかみ・とも／日本語文化系一年生)



■薬師湯の前でスタッフの方とポーズ。

島根県の伝統工芸・八雲塗

漆世云のわたなべ

(出雲市平田町)

河村光希



皆さんは、「八雲塗」って知っていますか？

八雲塗とは、出雲地方でつくられている漆器の名前です。漆器ですから、木地に漆を塗り重ねてつくってあります。

山口県から島根に来て、島根のことなんてまったく分からなかった私です。

いったい何を取り上げたらいいのか悩んでいました。そんな時、ネットでみつけた「八雲塗」という言葉。ホームページを開くと、綺麗な花の絵に彩られた漆塗りの器が目に入りました。私は「これだ！」と思い、早速取材を申し込みました。

私が今回訪れたのは、出雲市平田町に工房兼お店を構えている「漆芸のわたなべ」です。八月八日午前10時過ぎ、強い陽差しが照りつける中を取材にお伺いすると、ご主人の渡部直人さんと奥さんの春江さんが、私たちを優しく迎えてくださいました。

八雲塗とは

八雲塗などの漆器は、木地の上に漆を塗り重ねていきます。

漆器は、①「木地」(お椀や盆など、漆を塗っていく素材(素地、木地)をつくる)、②「下地」

(木地に下地という漆を塗る)、③「塗り」(下地の上に中塗り、上塗り)と漆を塗っていく)、④「加飾」(金粉や銀粉などで文様を装飾したり(蒔絵)、色漆で絵を描く)という、四つの工程を経てつくられます。

八雲塗は、下地に中塗りをした後ですぐに加飾し、その上に透明な漆を塗って仕上げます。この点が、通常の漆器と異なります。



なる八雲塗の特徴です。この技法は、江戸時代から明治のはじめにかけて、松江で開発された技法なのだそうです。

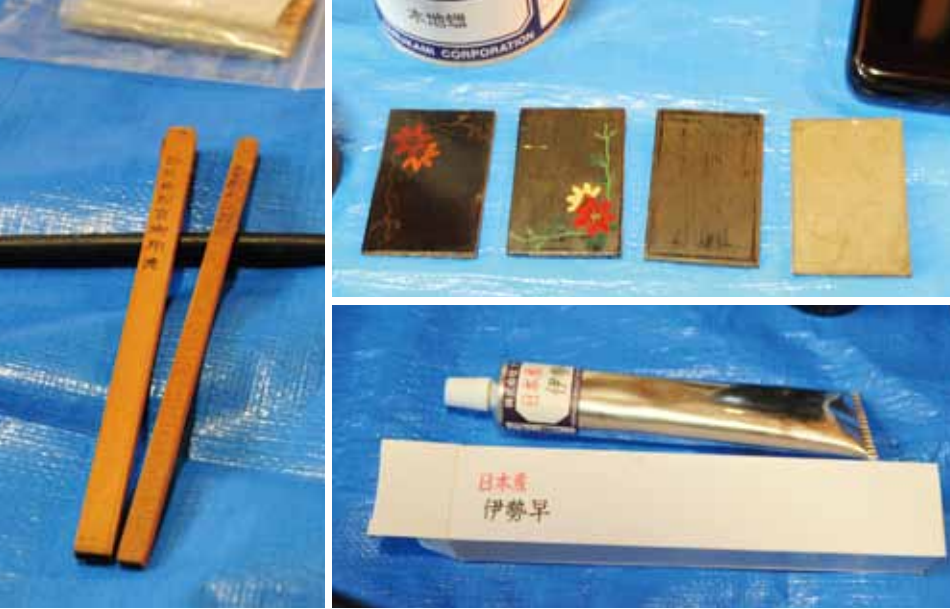
八雲塗をはじめとする漆器づくりの作業は、分業で行われています。それぞれの工程の職人は、①木地師、②下地師、③塗師、④蒔絵師と呼ばれています。

渡部さんは、下地まで塗ってある半製品を北陸から仕入れて、最後の二つ、塗師と蒔絵師の作業を行っています。八雲塗は、日本全国にそれぞれ専門の業者がいて、はじめて成り立っているのですね。渡部さんに、八雲塗の魅力を聞いてみました。

「落ち着いた美しさが八雲塗の魅力です。一回上に透明な漆をかけることで、けばけばしくなく落ち着いた感じになります」

八雲塗は、透明な漆を重ねることで、色に落ち着きが出ます。それだけ





■ (右上) 八雲塗の工程。右から下地、中塗り、絵付け、上塗り。(右下) 日本産の高級生漆「伊勢早」。(左) 漆刷毛。

でなく、八雲塗の漆器は使えば使うほど色みが変わってくるので、本当に味がある魅力的な工芸品なのだそうです。そのように話す渡部さんの顔は、すこし誇らしげでした。

渡部さんと漆芸

渡部さんは、昭和二年のお生まれです。一八歳のとき、出雲市今市町中町の丹後屋という漆器店に修行に入りました。当時は、生活の中に漆器が溢れてい

たので、自然に漆器に興味を持ったのだそうです。

渡部さんが修行を始めた昭和四〇年代は、高度経済成長の時代で景気が良く、漆器もよく売れたそうです。漆器などの和食器は、一個、二個と数えるのではなく、一客、二客と数えます。当時は、結婚式などの儀式はほとんど家で行っていたので、お椀などを二十客まとめて買っていくお得様がたくさんいたそうです。

昭和五十八年、渡部さんが三七歳のとき、丹後屋で十九年間漆器づくりの技を磨いた後、出雲市平田町の生家に、「漆芸のわたなべ」を構えて独立しました。

しかし、昭和五十年代にはすでに経済成長期は終わっており、景気は低迷していました。そのうえ、生活様式の変化(核家族化、式場の普及など)やプラスチック製品に押されて、漆器の需要も低迷の時代を迎えていました。商売の経験のなかった渡部さんは、とてもご苦労なされたそうです。

今では売れても一度に五客くらいで、まとめて二十客ということはなくなってしまいました。漆器を買っていく人も、四〇代以上の女性がほとんどだそうです。若い人は、アクセサ

リーなどの小物をたまに買っていくことがはめつたにありません。

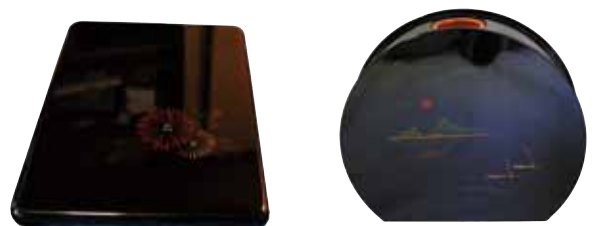
漆と日本人

八雲塗に欠かせないのが、漆です。私たちは意識していませんが、漆は昔から人びとの生活を支えてきました。陶器は英語で「チャイナ」と呼ばれますが、漆器は「ジャパン」と呼ばれています。それほど、漆器は日本人と深く関わってきたのです。

山陰地方では、縄文時代の前期(約六八〇〇年前)の夫手遺跡(松江市手角町)から、採取した漆液を入れた土器が見つかっています。弥生時代になると、松江市の西川津遺跡から漆を塗ったお椀や櫛、土器などが発見されています。こんなに昔から、漆は、塗料や接着剤、防腐剤、時には魔除けなどとして活用されていたのです。

漆はウルシの木から採ります。ウルシの木に傷をつけると、そこから樹液が沁み出していきます。この樹液を集めたものが、「荒味」と呼ばれる天然の漆液です。この荒味漆から、大きく分けて三種の漆がつけられます。

荒味漆のゴミを濾過しただけの漆液を、「生漆」と呼びます。生漆を攪拌し



て粒子を細かく均一にする工程を「ナヤシ」、生漆を温めて攪拌しながら水分を除去する工程を「クロメ」と呼びます。ナヤシとクロメを行って生漆を精製したものが、「透漆」です。

また、生漆を精製する過程で鉄粉や水酸化鉄を入れると、漆液は黒くなります。これが「黒漆」です。漆黒と表現される黒色は、黒漆ならではのものです。

渡部さんの口からは素黒目、木地蠟、朱合など、漆の名前がポンポン飛び出していきます。後で調べると、これらは透漆の種類のようなものです。用途に応じて、透漆だけでもたくさん種類があるので、そのうえそれらの名前には、昔から言い習わされてきた日本語に独特の風合いがあります。漆に関わる技術の、底知れな



■漆器の乾燥棚。

い奥深さを感じさせます。

漆芸の世界

渡部さんの工房は二階にあります。門外漢の私たちのために、渡部さんは八雲塗の工程をかいつままで説明してくださいました。

まず、下地が塗ってある半製品の器に「中塗り」を施します。黒漆を刷毛で薄く塗るのです。漆を塗る刷毛を見せていただきます。一見すると細長い棒のようですが、よく見ると薄い板が張り合わせてあり、その中に白い毛がぎっしり詰まっています。毛先が減って短くなると、木を削って内側の毛を出していきます。カッターナイフのような工夫です。

次に、「乾燥」です。押し入れのような漆風呂の中に器を並べて、一、三日乾かします。乾燥というと普通は水分を取り除くことですが、漆の乾燥はそうでは

ありません。漆液中の酵素の働きで化学反応が起こり、漆が固くなることなのです。だから、高温多湿でないと漆は乾かないそうです。

次は、「研ぎ出し」という工程です。乾燥した器を木炭と紙やすりで磨いて、表面を平らにします。漆器って、磨くのですね。それも炭を使って、時間をかけながら。刷毛で漆を塗ると、表面は自然になめらかになるのだと思込んでいた私は、ここでもビックリしてしまいました。

中塗り、乾燥、研ぎ出しという工程を数回繰り返した後で、その上に絵付けをします。色漆は、透漆に顔料などを混ぜて調合してつくるそうです。ここにも専門の業者がいて、色やツヤなどを指定すると、注文に応じてつくってくれます。漆の世界独自のネットワークがあるので、すね。

最後に、絵付けをした器の上に、木地蠟という透明な漆を塗ります。この点

が、他の漆器に見られない八雲塗の特徴です。

そして、乾燥させてから木炭と紙やすりで研いだ後で、最後の仕上げの作業にはいります。研磨用の機械の先にバフという円盤状の布を付けて、伊勢早という上等の生漆を塗ります。塗るといふより、漆をすり込んでツヤを出す、という感覚だそうです。

いまでも上等な製品は手で磨きますが、昔はすべて綿布と「鹿の角粉」を使って手で磨いていたそうです。渡部さんの工房で見せていただきましたが、鹿の角から粉がつけられて、それが研磨剤として使われていたのです。漆や角粉から刷毛などの道具まで、いままでまったく知らなかった漆の世界が突然目の前に現れて、日本にいながらカルチャーショックを受けてしまいました。

八雲塗をはじめとする漆器業界は、現在厳しい状況に立たされています。島根県物産協会に登録して



■(上段)蒔絵を描くときに用いる金粉。
(下段)透漆が入った缶。右から朱合、木地蠟、素黒目。

いる八雲塗の店は、現在、三店になってしまいました。県全体でたったの三店です。渡部さんも、『漆芸のわたなべ』は私の代で終わるかもしれないけれど、『八雲塗』という名前はどこかで残さないといけない」と、真

剣な表情で語っていました。

縄文の昔から、日本人は漆文化を育んできました。そして長い時間をかけて、漆液の採取と精製、木地製作、塗り、加飾などの職人、そしてそれらを支える道具づくりなど、日本全国に張りめぐらされたネットワークを形成し、漆産業を発展させてきたのです。

その過程で、各地で新しい技法が編み出され、輪島塗などの特産品が生み出されていきました。出雲にあるその枝のひとつが、八雲塗なのです。

このような地域の宝が、いま、近代化の波に飲み込まれようとしています。今回の取材を通じて、私は地域の財産が失われる寂しさと理不尽さを強く感じました。何とかならないものだろうか。

「やっぱり若者にも、もっと八雲塗を知ってほしい」。渡部さんの言葉が胸に突き刺さりました。私たち若者の責任は大きいのです。私たちの意識を、八雲塗のような漆器にも向けることが、まずは大切なことです。この文章がその一助になることを願っています。

(かわむら・みき／文化資源学系一年生)





創刊準備号 (2006年)
 巻頭エッセイ◎松江を想う 佐野史郎
特集◎スローな文化を探して
 妖怪と遊ぶ——「遠野物語」を訪ねて——
 スローなブーにしてくれ
 小さな木造校舎——塩津小学校を訪れて——
 木桶の中でスローに熟成——カネモリ醤油——
 商店探訪①辰巳屋商店 (境港市)
 街のおもしろ文化観察学入門
 やっぱり晴耕雨読が夢だなあ

カタカナで英語を遊ぶ
 日本神話・アイヌ神話・出雲神話と『もののけ姫』
 日本語でも異文化体験
 <コラム> 記号論の危機!?
 宍道湖のライバル 十三湖のシジミ伝説
 私が英語を読む理由
 夏の屋下がりのあるパーティー
 移動の文化
 <短編小説> 兄の線香花火
 <まんが> 出雲の阿国座
 紙の宝石——エクスリプリス (蔵書票) 雑感——
 <本の紹介> 池本喜巳『近世店屋考』
 <本の紹介> 筑紫哲也『スローライフ』
 マイ・オーゾー体験記
 <コラム> モロッコにて 国王の死に遭遇して
 氷の文化誌——かき氷の謎を追って——
 生活環境デザイン作品集 建築・椅子
 世界の民族楽器①シタール (インド)

第1号 (2007年)
 巻頭エッセイ◎島根は日本の宝物 錦織良成
特集◎働く／さまざまな仕事人
 日本庭園を造る*永島達二さん (足立美術館の庭師)
 牛を飼う*泰中静江さん (奥出雲町の牛飼いな人)
 魚を売り歩く*山本貴美子さん (鹿島町古浦の魚売り)
 小笹昭江さん (鹿島町御津の魚売り)
 勾玉を磨く*村田誠志さん (玉湯町のめう細工職人)
 桜を守る*周藤利夫さん (木次の桜守)
 鍔絵を描く*松浦満幸さん (仁摩町馬路の左官職人)
 シジミを獲る*原 侑三さん (宍道湖シジミ漁師)

へい・カンパニーからの手紙
 世界のインスタントラーメン大試食会
 木綿街道を歩く
 これ、何のおまじない?——安来「サンダワラ」編——
 勾玉作り体験記
 英語を学ぶってどんなこと?
 <童話> たんぼぼとまほうつかい
 あっ、「おはなしレストラン」だ!
 <まんが> 変わらないもの
 島根ってどんなイメージ?
 金と文化と資格と文学
 BILLY COMES TO MATSUE!
 本たちの受難
 アフリカの自然
 ロードトリップ
 銀幕の中のアメリカ
 有名な墓をたずねて——墓マイラーの旅——
 道草のある旅
 きらく湯よ、ごちそうさまでした
 街のおもしろ文化観察学入門——その式
 商店探訪②野波洋傘店 (松江市)
 光のインテリア——お部屋の一角をデザイン——
 世界の民族楽器②ダンバウ (ベトナム)

第2号 (2008年)
 巻頭エッセイ◎何も無いなあ。 FROGMAN
特集◎山陰の小さな博物館
 梶川理髪館 (鳥取県三朝町)
 和傘伝承館 (米子市淀江町)
 祐生出合いの館 (鳥取県南都町)
 祝風高橋 (出雲市大社町)
 飯南町民俗資料館 (島根県飯南町頓原)
 森崎窯業鬼瓦工房 (大田市温泉津町)
 歯の歴史資料館 (浜田市)

山陰で当地レトルトカレー大試食会
 Aussie tucker 体験レポート
 朝市・直売所を楽しむ
 商店探訪③岡本一銭屋 (米子市)
 家を獲得する人々——ブラジルの住宅事情——
 「再生」の春——モンゴルの現地調査から——
 イギリスでみつけた小さな「出雲」
 ASEANの仲間たち
 松江のエネルギーを世界へ
 ——松江出身3/5ロックバンドSupe——
 <短編小説> めまい-くん
 <まんが> 秘密
 回顧談
 異郷の地に咲く詩の心
 注連縄におまじない
 和らぎ処 紡——高松津津子さんに聞く——
 懐かしのアイスキャンデー——佐川末廣堂 (安来市)
 こだわりのあご野焼き——青山蒲錦店 (松江市)
 街のおもしろ文化観察学入門——その参
 空間をデザインする 光と影をデザインする
 世界の民族楽器③ガムラン (インドネシア)

第3号 (2009年)
 巻頭エッセイ◎無性に島根が好きです。 六子
特集◎鉄
 山陰と鉄——玉鋼から特殊鋼へ——
 たたら吹き 村下 木原明氏に聞く
 雲州忠善刃物
 工房たかちゃん
 鉄筋彫刻とジャズ——徳持耕一郎さんの工房を訪ねて
 米子駅見学記
 境線に乗って
 鉄道のウラ 後藤総合車両所 (米子市)
 鉄にまつわる島根県内の伝承文学
 鉄と楽器

出雲弁保存会会長 藤岡大拙先生に聞く
 山陰で当地バーガー大試食会
 癒しの田舎ツーリズム (島根県邑南町)
 ベコとゴンベ 隠岐の珍味を味わう
 ギリシャ紀行——ギリシャから見つめたハーンとローザ
 北京の下町 胡同探訪
 スタンプ——旅の思い出——
 インドネシアの断食月
 ダスティン・キッドと行く! ミニ神社巡り
 <短編小説> ミント
 <まんが> 縁結び
 <本の紹介> 『唐川びとへ』
 ご存知ですか? この山陰歌人
 チーム・イエローの「英語でかみしばい」
 松江ぶらりロード——北堀・石橋・奥谷——
 商店探訪④いけばいんストアー (境港市)
 幻の食材を求めて 斐川町出西しょうが
 ホーランエンヤ——馬淵伝馬頭取 角田一雄さんに聞く
 <コラム> 馬淵の練習風景
 街のおもしろ文化観察学入門④倉吉編

第4号 (2010年)
 巻頭エッセイ◎複眼で見る 松本侑子
特集◎山陰の農村 ほっこり出雲の旅
 鳥取市福部町 ラッキョウ畑の巻
 鳥取県北栄町 長芋畑の巻
 鳥取県大山町 芝畑の巻
 鳥取県境港市 白ネギ畑の巻
 松江市八束町 薬用人参畑の巻
 島根県出雲町 ジュンサイの池と悦ちゃん農園の巻
 出雲市唐川町 お茶畑の巻
 浜田市旭町都川 棚田の巻

山陰の米粉食品大試食会
 商店探訪⑤今岡カクチ店 (松江市)
 石見神楽面 柿田勝郎面工房を訪ねて
 石見銀山天領太鼓の響き
 松江の橋——今と昔をつなぐ——
 ノルマンディー小旅行——ルーツをもとめて——
 ジャジャンの楽しみ——ジャワの市場と屋台の食——
 言葉によるケア
 留学生事情
 ——短大卒業生@セントラル・ワシントン大学
 おはなしレストランライブラリーへようこそ
 棚田便り——雲南市山王寺から——
 <短編小説> バイクキング
 <まんが> 夏のはじまり
 街のおもしろ文化観察学入門⑤米子編
 R431物語①椅子

第5号 (2011年)
 巻頭エッセイ◎隣人から見た「出雲」 足立倫行
特集◎紙
 驚きの連続! 王子製紙米子工場見学記
 新聞工場へ行こう 山陰中央新報製作センター
 加藤紙店 紙と人を繋ぐ
 本・雑誌ができるまで 今井印刷・日宝総合製本見学記
 山根和紙資料館 紙の歴史を伝える学校
 石州和紙に触れる
 ノート制作 吾郷屋さん
 想いを紙に 書道 若月響子さん

山陰のかまぼこ大試食会
 バクでまちおこし 島根県川本町
 堀川遊覧 船頭さんに学ぶ
 ブルーベリー農園を訪ねて 奥出雲町橋本農園
 和の心 日本の音
 魅力いっぱい! 御来屋の旅
 一畑電車で行く出雲の旅
 トロッキ列車「奥出雲おちろ」の旅
 おおきくなあれ! トウガラシ
 ヤマタノオロチの伝承地探訪
 Jリーグのクラブを目指して
 ——松江シティフットボールクラブ——
 隣の国にお邪魔します。——韓国 お茶とお菓子の旅
 一大決心! アメリカ人旅
 グラムで働く
 震災後のみちのくで
 石巻に、のんびり雲のかかる日
 商店探訪⑥水木しげる文庫
 <まんが> 伝来
 街のおもしろ文化観察学入門⑥鳥取編
 R431物語②パン

地域文化研究
 地域探検学
 しまねツーリズム論
 妖怪学
 小泉八雲入門
 へるん作品鑑賞
 島根の祭りと芸能
 山陰の民話とわらべ歌
 人文地理学
 文化人類学
 自然観察学
 多文化共生ネットワーク論
 世界の女性と暮らし
 観光資源学
 ホスピタリティ論
 地域デザイン論
 建築文化論
 住生活学
 インテリアと文化
 文化情報誌制作 I
 文化情報誌制作 II
 基礎デザイン・色彩論
 グラフィックデザイン
 コンピュータグラフィックス
 写真表現法
 DTP演習
 観光と文化
 まちづくり学
 消費生活論
 歴史的建造物の検証
 文化資源の保護
 環境資源リノベーション
 アメニティ論

リスニング音読
 多聴英語
 映画リスニング
 英会話 A
 英会話 B
 英語スピーチ
 ライティング基礎
 英文誌制作
 創作ライティング
 コミュニカティブ英文法
 英語学入門
 資格英語 I
 資格英語 II
 メディア英語で知る世界
 観光英検英語
 トラベル・イングリッシュ
 文化とガイド
 キッズ・イングリッシュ
 多読演習 A
 多読演習 B
 英語読解演習 I
 英語読解演習 II
 英文学入門
 米文学入門
 英米文学を読む A
 英米文学を読む B
 英米短編講読
 イギリス研究
 アメリカ研究
 英米文化事情

日本古典文学入門
 日本近代文学入門
 中国古典入門
 古典文学を読む
 近代文学を読む
 中国古典を読む
 児童文学を読む
 日本古典文学演習
 日本近代文学演習
 日本古典文学を歩く
 日本文化入門
 日本文化論
 日本文化演習
 詩と小説の創作
 古文書解読
 日本語学入門
 日本語史
 一般言語学
 意味とことば
 日本語の構造
 社会言語学
 表現文法とレトリック
 日本語教授法
 音声学
 書道 I
 書道 II



「地域文化研究」——山陰地方の地域文化の特色を学びます。自分の生まれ育った地域の小さな文化を調べて発表したり、松江の街を探索したり。見学もあります。(写真は「カネモリ醤油」見学。100年物の木桶がいっぱい)



「小泉八雲入門」——授業を担当するのは小泉八雲のひ孫、小泉凡教授。本学ならではの特徴的な科目です。授業ではアイルランドの伝統音楽に欠かせないブリキの笛=ティン・ホイッスルの演奏も。



観光フィールド・トリップ

海外からの留学生や研究者、ALTなどをゲストとして招き、英語で観光案内する1泊2日の小旅行。



「リスニング音読」——「まねる」が語学の王道！音読トレーニングとリスニングトレーニングの両輪で、英語の音感をBrush Up!!



八重垣ツアー

4月、日本語文化系では1年生を歓迎する徒歩遠足に出かけます。日本語文化系らしく、行く先々で歌も詠みます。さすがでしょ!!



「書道」の授業

日本の文化に深く刻み込まれた書道を学び、日本文化を実体験として学びます。墨の香りのいと清々しきこと。

かるた大会

日本語文化系恒例の百人一首のかるた大会。先輩の中には、かるたクイーンもいたんですって!! 八重垣ツアーとともに、学生と教員の親睦を深めます。

文化資源学系



「地域探検学」——文化資源学系の特徴は盛り沢山のフィールドワーク。特に奥出雲町での2泊3日の合宿を組み込んだ「地域探検学」は、ほぼ全編がフィールドワーク。地域の人たちとの交流は、成長へのジャンプ台。



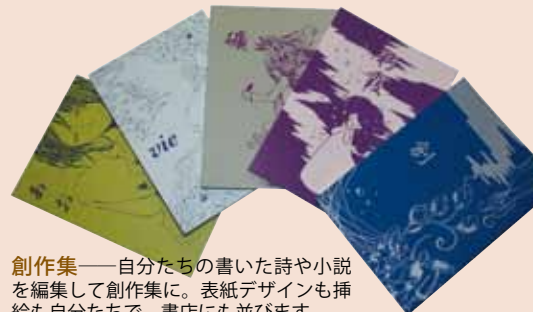
「キッズ・イングリッシュ」
 「赤ずきんちゃん」は英語で「Little Red Riding Hood」。手作りの紙芝居で、英語で地域の子どもたちにおはなしの世界をプレゼントします。

英語文化系



南ユタ大学の学生との交流は2011年度から始まりました。体育館でのドッジボールでは、米国と日本ではルールが少し違っていることがゲーム途中で発覚。話し合いの結果、「When in Rome, do as the Romans do」のことわざ通り、Japanese rules にとつて試合再開。午後は松江城周辺を案内しました。

日本語文化系



創作集——自分たちの書いた詩や小説を編集して創作集に。表紙デザインも挿絵も自分たちで。書店にも並びます。



本誌『のんびり雲』を発行している

総合文化学科

とは、こんな学科です。



「チュートリアル」のゼミ風景——高校から短大への学びの橋渡し

教員の研究室で行われる、1年生の少人数ゼミ形式の授業です。はじめはお互い遠慮がちですが、だんだん率直に語り合える仲間に育っていきます。ゼミ担当教員は、1年次の担任です。

- チュートリアルⅠ
- チュートリアルⅡ
- 日本文化史
- 出雲古代史
- アジア研究
- アフリカ研究
- 食の文化経済史
- 日中交流史
- 日韓交流史
- 特別講義
- へるん探義
- アジア文化交流
- アジア文化演習
- 海外語学研修

- 哲学
- 心理学
- 文学
- 読み聞かせの実践
- 音楽
- 経済学
- 社会学
- 日本国憲法
- からだと栄養
- 数学
- 生物学

- 健康・スポーツ科学概論
- 運動方法実習Ⅰ
- 運動方法実習Ⅱ
- キャリア・プランニング

- 日本語
- 英語Ⅰ
- 英語Ⅱ
- フランス語入門
- フランス語
- 中国語入門
- 中国語
- 韓国語入門
- 韓国語

- コンピュータ・リテラシーⅠA
- コンピュータ・リテラシーⅠB
- コンピュータ・リテラシーⅡA
- コンピュータ・リテラシーⅡB
- 卒業プロジェクト



おはなしのじかん——おはなしレストランライブラリーでの読み聞かせ1年生の授業「読み聞かせの実践」、2年生の卒業プロジェクトの1つとして、地域の子どもたちへの絵本の読み聞かせに取り組んでいます。子どもたちとの交流には、確かな手ごたえがいっぱい！



「アジア文化演習」——中国・韓国への研修旅行
万里の長城。北方边境防衛のために、こんな長大な城壁を造った中国の古の人々に思いを馳せつつ……、上り坂をフーフー言いながら登ります。



「海外語学研修」——米国セントラルワシントン大学（CWU）での語学研修

2週間の滞在中、午前中はキャンパスで実践英語をしっかりと勉強し、午後はマリナーズ観戦、乗馬体験、OGが活躍する現地の企業訪問など、様々な活動に出かけます。異文化を肌で体験する絶好のチャンス！

- 総合文化学科には、文化資源学系、英語文化系、日本語文化系の3つの系（コース）があります。
- それぞれの系が多様なカリキュラムを用意しています。
- 地域での実践・体験型授業（フィールドワーク）の充実に力を入れています。



「卒業プロジェクト」——1つのテーマにじっくり取り組む

2年生になると、卒業プロジェクトのゼミに所属します。1月は論文や作品の仕上げ、抄録原稿の提出、2月は発表会に向けての準備、と頑張りどころいっぱいです。ゼミ担当教員は2年次の担任です。

- 生涯学習概論
- 図書館概論
- 図書館制度・経営論
- 図書館情報技術論
- 図書館サービス概論
- 情報サービス論
- 児童サービス論
- 情報サービス演習Ⅰ
- 情報サービス演習Ⅱ
- 図書館情報資源概論
- 情報資源組織論
- 情報資源組織演習Ⅰ
- 情報資源組織演習Ⅱ
- 図書館基礎特論
- 図書・図書館史

総合文化学科のカリキュラムには「文化情報誌制作Ⅱ」という科目があります。その授業内容は、ずばり『のんびり雲』の制作。2年生向けの配当科目です。1年生は授業としてではなく、サークル活動のような形で『のんびり雲』の制作に参加します。



「日本文化史」——大講義室での授業風景
座学も大事。新たな知識・視点に出会うことができます。

編集後記

なに少なくとも大丈夫なのかと思いましたが、一年生がたくさん参加してくれて、無事に雑誌が出来上がりました。

◆ 今回の「のんびり雲」では、特別企画として「へあらびかコーヒー」で楽しむ六子ののんびり+ほつこりライブを開催しました。アーティストの方のライブ模様、インタビュ어의記事を書かせてもらうという体験が出来て大満足です。どうでしたか？(ドキドキ) 六子さんとは初対面でしたが、とても気さくな方で本当に可愛くて……テンションが上がりました(笑)。今までよりも六子さんの曲も聴くようになり既に虜です！ 本当に素敵な出会いでした。会場のへあらびかコーヒーもとても心地好い雰囲気の中で、コーヒーもカレーも絶品でした。皆さんも是非行ってみてくださいね。

◆ 最後にりましたが、六子さんをはじめとする(株)ミュージアの皆様、会場としてお世話になったへあらびかコーヒーの皆様、ライブに足を運んでくださった皆様……この企画に関わってくださいました。全ての方に心より感謝申し上げます。(里沙)

◆ 昨年の「のんびり雲」第5号でも記事を書きました。雑誌が出来上がったときの何とも言えない喜びをもう一度味わいたくて、今年の「のんびり雲」の制作にも参加しました。二年生は授業として制作を行うのですが、何と集まった二年生編集部員は七人！ こん

今年も昨年より多くの取材に同行しました。取材に行くごとに私の知らなかった山陰の人、街、モノ、味を知ることができて、とても貴重な体験でした。私は「山陰のまんじゅう試食会」を担当したのですが、まんじゅうが一度に全部は集まらないため三回に分けて試食会を行いました。嫌々三回とも参加してくれた編集部員もいて申し訳なかつたです。けれどもみんなの協力のおかげで本当に良い記事が書けました。

◆ 「のんびり雲」は山陰に住んでいる人も知らないような山陰のいいところを伝える雑誌になっているので、ぜひたくさんの人に読んでもらいたいです。(詩織)

◆ 高校時代から、やってみて、入学して「のんびり雲」の編集部員募集と聞いたとき「やるしかない!!」と思い参加しました。

取材に行ってから約二か月半でようやく完成しました。初めての取材で聞いたことが上手く聞けず、もっと深く聞けたのではと後悔もしました。そして、取材から原稿を仕上げるまでが長かったです。先生に駄目だしをくらっては直しの繰り返しで、心が折れる寸前でなんとか原稿が完成。

達成感に浸る間もなく誌面のレイアウト作業に入ります。写真を張り付けるだ

けと軽く考えていた私は間違っていました。何日にもわたり、慣れないパソコンとの格闘です。何とか出来上がったときは、達成感より、無事にできたという安心感の方が大きかったです。

◆ 今回のような経験をした私ですが、来年も編集部員を希望すると思います。「のんびり雲」にはそんな魅力とやりがいがありました。(知里)

◆ 高校生の時、先輩や高校の先生から「楽しいよ」「やってみたいら？」と言われて始めた「のんびり雲」。実際、いろんな人の取材について行くのは楽しかったし、自分の記事は取材に行くことはなかったが、たくさん人の話が聞けて面白かった。

◆ が、しかし。いざ記事にしようという段階で「あれ、これ本当に完成するか？」と思い始め、途中からは一年生ののんびり雲仲間と「やばい！どうしよう！」と騒ぎ出す私。しかも、「挿絵もやりません」と、やったこともないことにまで手を出してしま

い、締め切りが近づくと、締め切りが近づくと、つれて頭はパニック。安易に考えていたが、挿絵を描くということがこんなに大変なのかと初めて知った。

◆ 記事が完成に近づくと、「これがたかさんの人に読まれるのか」と恥

ずかしくなってきた。編集長からOKをもらい、自分としても「頑張った」と思える出来だと思いが、しかし不安は拭えない。手作り感満載の「カルチャーショック島根」、楽しんでもらえたら幸いです。(さと実)

◆ 第六号はひとときわ思い出に残る号となりました。特別企画の六子ライブは、かなり大それた試みでしたが、おかげさまでほとんど事が運び、気がついたら終わっていた感じです。ほんとうに、ほつこりました。

◆ 三浦義武の記事は、とても私たちの手に負えないということで、浜田市世界こども美術館の神英雄さんをお願いしたのですが、これがまた絶妙のタイミングでした。長年、義武の足跡を追ってきた神さんは、最近になって次々と新たな事実を突き止め、集大成のときを迎えておられたのです。(大)

のんびり雲 第6号

2012年10月30日発行

編集 「のんびり雲」編集部

◆ 責任者：大塚 茂
e-mail: s-otsuka@matsue.
u-shimane.ac.jp

発行 島根県立大学短期大学部

松江キャンパス

総合文化学科

〒690-0044

島根県松江市浜乃木7丁目24-2

TEL. 0852-26-5525 (代表)

FAX. 0852-21-8150

印刷 今井印刷株式会社

制作協力 小泉 凡 小倉佳代子

制作指導 鹿野一厚 大塚 茂